

## 序文

私は登山が好きだ。低山から高山まで登る。「なぜ、山に登るのか」という有名な質問がある。それに明快な答えを出すつもりはない。

山頂の景色や感動はあまり期待していない。一歩一歩のプロセスが好きなのだ。地図を見、磁石で方位を確かめ、等高線の起伏を登っていく。晴れた日の山登りも捨てがたいが、天候の荒れた逆境と戦おうとする、登山のほうがむしろ好きだ。

酸素の薄い3000メートル級の山で、目指す目的地はまだ遠い。日没が近づいてきている。体力はかなり使い果たしている。早くたどり着きたい、と気持ちは焦る。山で焦るとろくなことはない、と長年の経験からわかっている。焦燥感は胸の奥に押し込め、一歩ずつ登山靴を踏みます。

「ここで立ち止まったら、負けだぞ」とつねに自分に言い聞かす。この先、疲労困憊でも目的地にいたならば、テントを張り、食事を作り、寝床を準備する。それを思うとつらい。まさに苦しさとの戦いだ。それが好きなのだ。

私は28歳で大病した。長期入院だった。当然ながら、登山からいつとき離れた。5カ月後に退院しても、さらにわが家での2年間の自宅療養だった。3人の幼い子どもがいた。収入面からも生活は困窮の極みだった。その逆境が、私に書くことを与えてくれた。

働けるようになった数年後、良い指導者に巡り会った。『下手でも10年間、毎日書きつづけければ、小説家になれる』という。それを信じて、一途に書きつづけた。しかし、10年経っても、泣かず飛ば

ずで、受賞歴もないし、他人のまえでは「小説を書いています」と話せなかった。

「あと5年は書かせてくれ。かならずものにするから」

そう妻に言って、子どもの養育、家事手伝いなど、まったく見向きもしなかった。一円にもならない、原稿用紙にひたすら文字を書き込む作業をつづけた。約束の期限が来た。妻には「小説家」としての存在を示せず、夫婦の不協和音が高まった。

習作時代は、つねに苦しい登山と同じ。逆境で投げ出せば、それで終わり。「ここまできて、終わりにたくない」と書きつづけた。何のために小説を書いているのか。それは「生きてきた証」と自分自身に答えを与えていた。

文章力が高まってきたのだろう、エッセイに投稿すれば、高い確率で入選したり、お金が入ってきたりするようになった。さらには小説の受賞が毎年のように続いた。賞金の半分は、苦勞をかけた妻に自由なお金として渡す。表彰式をかねた旅行にも、ふたりで出向いた。それが夫婦の尖った感情からの修復にもなった。他方で、書くことがだんだん私のライフスタイルになってきた。ライター、ジャーナリスト、と書くことへの領域が広がった。

2年前の春に、取材で『元気に百歳クラブ』の『ひだまり』に出向いてみた。

この縁から『エッセイ教室』の講師を引き受けた。受講生はみな人生経験が豊富だから、作品一つひとつに味がある。教える側の私自身にも学ぶことが多い。エッセイは内容に深みがあれば、文章がたとえ荒くても、多少破たんがあっても、濃密さがなくても、読者の心にひびくものだ。

この教室で、最も感心させられたことは、受講生はなにしろ熱心で、前向きだ。学ぶ精神と心構え

が身につけている。やる気ある受講生だから、一人ひとりの文章を磨いてあげよう、と私は決めた。それは『エッセイの書き方』という領域を越えている。前後の文書の関連から、「は」「が」の違いについても、朱を入れることもある。主語を置く場所、修飾の仕方、比喩や会話にも立ち入っている。レクチャーでは「純文学」の文章技術レベルで語ることもある。

受講者の現在の力量に応じた、文章添削は時間を要す。ときには、他の執筆との兼ね合いで、「ここまで、エッセイ教室に時間をかけるとは……。」と自分の性格にあらんとすることがある。

20回を数えると、各人の文章はめざましく上達してきた。エッセイの吸引力のポイントが身につく、素材の切口のよさが目立つ。それがいまや指導者としての喜びにつながっている。

教室が終わると、二次会だ。受講生どうしはエッセイの作品を通し、生き方、人格、ものの考え方、性格などがわかっている。だれもが学生時代に戻ったような『いい友と知合った』という雰囲気だ。

私はふと気づいた。『エッセイ山』の山頂まで、安全第一で道案内する、プロ・ガイドとは違う。私は山岳部のリーダーなのだ。一人ひとりに登り方、登山用具の使い方、天候の読み方、地図の見方、ビバークまでも教える。『エッセイの書き方』の基本のみならず、文章で感動させる細かい技法までも指図している。それは山岳で登攀（とうはん）技術を教える、自分の姿と重なり合うものだ。

平成二十年五月

西原健次